

# 概 要

## 1 調査の目的

児童、生徒及び幼児(以下「児童等」という。)の発育及び健康の状態を明らかにすること

## 2 調査事項

児童等の発育状態：身長、体重及び座高

児童等の健康状態：栄養状態、せき柱・胸郭の疾病・異常の有無、裸眼視力、聴力、眼の疾病・異常の有無、耳鼻咽喉頭疾患・皮膚疾患の有無、歯・口腔の疾病・異常の有無、結核の有無、心臓の疾病・異常の有無、尿検査、寄生虫卵の有無、その他の疾病・異常の有無及び結核に関する検診の結果

## 3 調査の対象

(1) 満5歳から17歳までの児童等の一部(抽出調査)

小学校、中学校、高等学校及び幼稚園のうち、文部科学大臣があらかじめ指定する学校(以下「調査実施校」という。)

(2) 発育状態調査は、年齢別男女別に抽出された者

健康状態調査は、在学者全員

ただし、次に掲げる高等学校の生徒は調査対象者から除く

(ア) 全日制課程及び定時制課程に在籍する満18歳以上の生徒

(イ) 通信制課程の生徒

## 4 調査の規模

区 分	学 校 総 数	調査実 施校数	児童等総数 (A)	発育状態調査 対象者数 (B)	抽出率 B/A(%)	健康状態調査 対象者数 (C)	抽出率 C/A(%)
幼 稚 園	508	41	65,892	1,639	2.5	2,975	4.5
小 学 校	778	63	285,439	5,925	2.1	33,406	11.7
中 学 校	379	43	145,106	5,143	3.5	21,288	14.7
高等学校	171	36	136,857	2,920	2.1	34,464	25.2

\* 学校総数及び児童等総数は、平成19年度学校基本調査報告書(文部科学省)による

## 5 調査データの出典

平成19年4月1日から6月30日までに実施された学校保健法による健康診断の結果内容

[利用上の注意]

年齢は、平成19年4月1日現在の満年齢である

# 1 発育状態調査結果

## (1) 身長

今年度・前年度及び親の世代(30年前の昭和52年度の数值。以下同じ。)の年齢・男女別の平均値は表1のとおりである。

### ① 前年度との比較

前年度の同年齢と比べてみると、男子では、最も増加しているのは、10歳の0.6cmで、最も減少しているのは、14歳の1.1cmである。

女子では、最も増加しているのは、9歳及び10歳の0.7cmで、最も減少しているのは、11歳の0.9cmである。

表1 男女・世代・年齢別 身長状況 (単位:cm)

区分	男 子				女 子			
	平成19年度 A	平成18年度	昭和52年度 B(親の世代)	差 A-B	平成19年度 A	平成18年度	昭和52年度 B(親の世代)	差 A-B
幼稚園 5歳	110.4	110.6	109.8	0.6	110.1	109.6	108.9	1.2
小学校 6歳 7歳 8歳 9歳 10歳 11歳	116.5	116.4	114.8	1.7	115.7	115.6	114.1	1.6
	121.9	122.1	120.2	1.7	121.5	121.6	119.6	1.9
	127.6	127.9	125.8	1.8	127.6	127.2	125.1	2.5
	132.9	133.7	130.9	2.0	133.8	133.1	130.6	3.2
	138.9	138.3	135.7	3.2	140.5	139.8	137.1	3.4
中学校 12歳 13歳 14歳	144.4	144.7	141.6	2.8	146.4	147.3	144.0	2.4
	152.3	152.3	148.2	4.1	151.8	152.1	149.2	2.6
	159.3	159.0	155.1	4.2	155.3	155.1	152.8	2.5
高等学校 15歳 16歳 17歳	163.8	164.9	161.4	2.4	156.3	156.5	154.6	1.7
	168.2	168.0	165.2	3.0	157.1	157.1	155.4	1.7
	169.8	169.7	167.5	2.3	157.3	156.8	155.6	1.7
	170.2	170.2	168.3	1.9	157.9	157.7	155.9	2.0

### ② 男女の比較

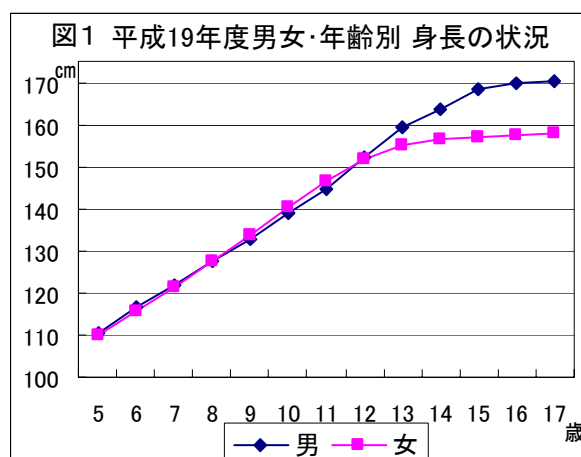
男女を年齢別に比較すると、表1・図1のとおりである。

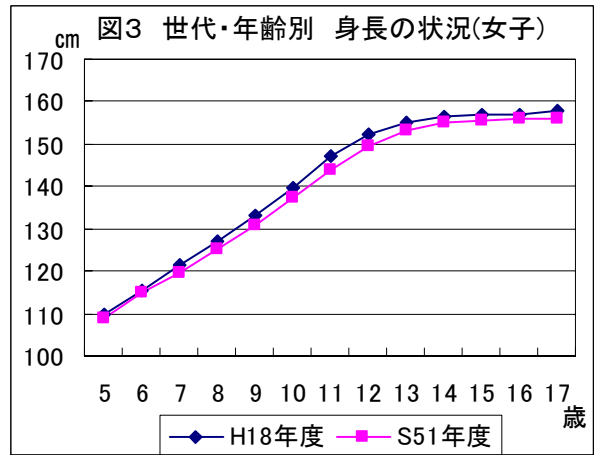
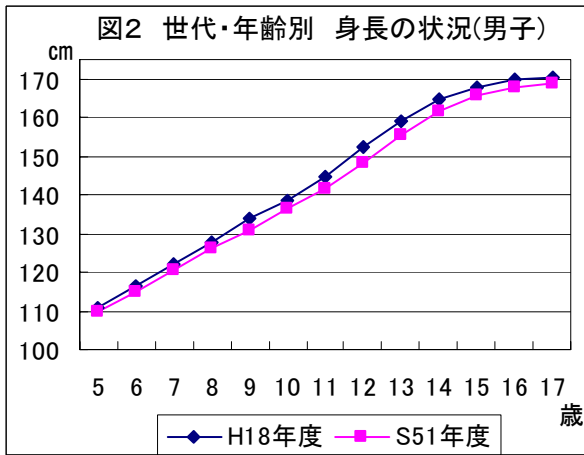
12歳まで差はほとんどみられず、9歳から11歳までは、女子が男子をやや上回っているが、12歳からは男子が女子を上回るようになり、16歳で12.5cmと差が最大である。

#### 〈親の世代との比較〉

親の世代と比較すると、表1・図2・図3のとおりである。

男女とも全年齢で親の世代を上回っている。男子では13歳で4.2cmと差が最大となり、15歳で親の世代の17歳とほぼ同じである。女子では10歳で3.4cmと差が最大となり、14歳で親の世代の17歳を上回っている。





③ 年間発育量<sup>1</sup>

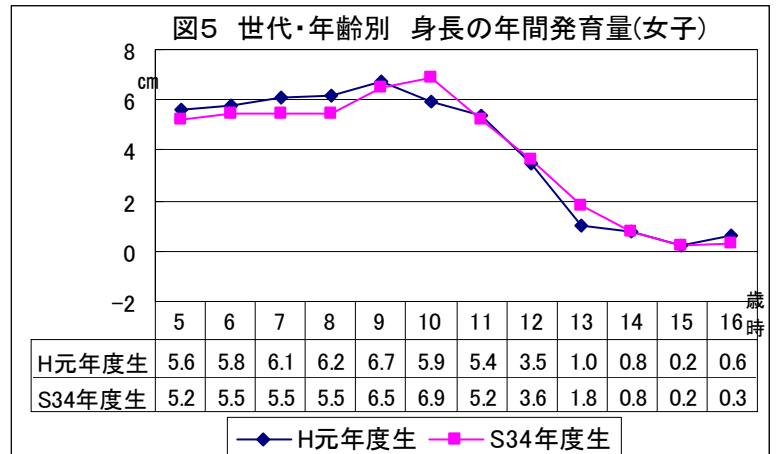
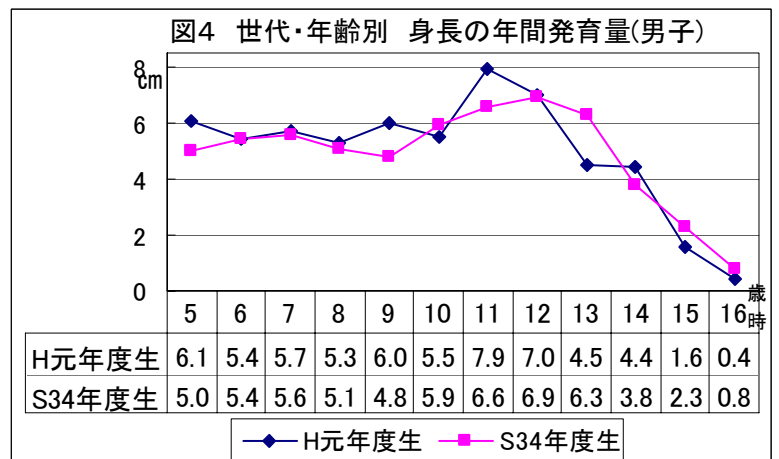
年間発育量を見ると、図4・図5のとおりである。

17歳(平成元年度生まれ)の年間発育量が最大となる時期は、男子では11歳時の7.9cmで、女子では9歳時の6.7cmである。

〈親の世代との比較〉

親の世代(昭和34年度生まれ)と比較すると、男子女子とも、最大となる時期は、親の世代よりも1歳早い。

また、男子では6歳、10歳、13歳、15歳及び16歳時を除き、親の世代を上回っている。女子では10歳時及び12歳から15歳時までを除き、親の世代を上回っている。



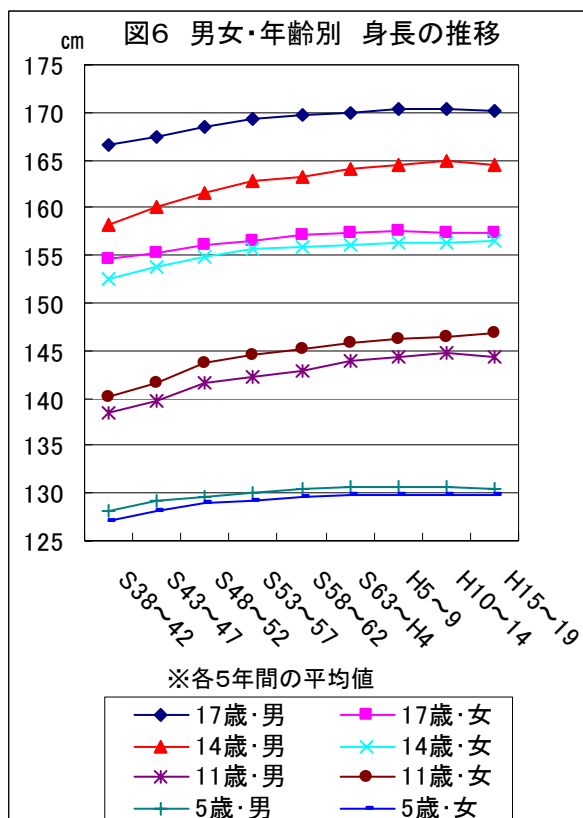
<sup>1</sup> 年間発育量とは、例えば、平成元年度生まれの「5歳時」の身長では、平成8年度調査6歳の値から平成7年度調査5歳の値を引いたものである。以下、他の生まれ年、年齢時及び体重においても同様。

#### ④ 過去45年間の推移

身長推移を、5歳(幼稚園)、11歳(小学校)、14歳(中学校)、17歳(高等学校)の4つの年齢について男女別にみると、図6のとおりである。  
(注:5年間の平均値を使用。)

昭和38年度から42年度の平均値からみると、増加しているが、年度区分が進むにつれて、上向きの傾斜は緩やかであり、ここ10年では下降傾向もみられる。

今年度を含む5年平均値をみると、前5年平均を上回っているのは、女子の11歳及び14歳のみである。



## (2) 体重

今年度・前年度及び親の世代の年齢・男女別の平均値は表2のとおりである。

### ① 前年度との比較

前年度の同年齢と比べてみると、男子では、最も増加しているのは、16歳の1.5kgで、最も減少しているのは、14歳の1.5kgである。

女子では、最も増加しているのは、10歳の0.9kgで、最も減少しているのは、11歳の1.5kgである。

表2 男女・世代・年齢別 体重の状況

(単位:kg)

区分	男 子				女 子				
	平成19年度 A	平成18年度	昭和52年度 B(親の世代)	差 A-B	平成19年度 A	平成18年度	昭和52年度 B(親の世代)	差 A-B	
幼稚園 5歳	18.9	18.9	18.7	0.2	18.8	18.5	18.2	0.6	
小学校	6歳	21.6	21.5	20.2	1.4	20.9	20.7	19.7	1.2
	7歳	23.8	23.8	22.6	1.2	23.6	23.5	22.1	1.5
	8歳	26.8	27.2	25.1	1.7	26.4	26.5	24.6	1.8
	9歳	29.8	30.8	27.9	1.9	30.1	29.6	27.6	2.5
	10歳	34.3	34.3	30.8	3.5	34.7	33.8	31.5	3.2
中学校	11歳	37.7	38.4	34.8	2.9	38.6	40.1	36.3	2.3
	12歳	43.9	44.3	39.4	4.5	43.8	44.1	41.1	2.7
	13歳	49.0	48.9	44.4	4.6	47.3	47.3	45.4	1.9
高等学校	14歳	53.1	54.6	49.9	3.2	49.9	50.4	48.4	1.5
	15歳	60.0	59.9	54.2	5.8	51.5	52.3	50.2	1.3
	16歳	62.4	60.9	56.9	5.5	53.9	53.2	51.3	2.6
	17歳	63.0	63.0	58.5	4.5	53.5	53.6	51.4	2.1

## ② 男女の比較

男女を年齢別に比較すると表2・図7のとおりである。

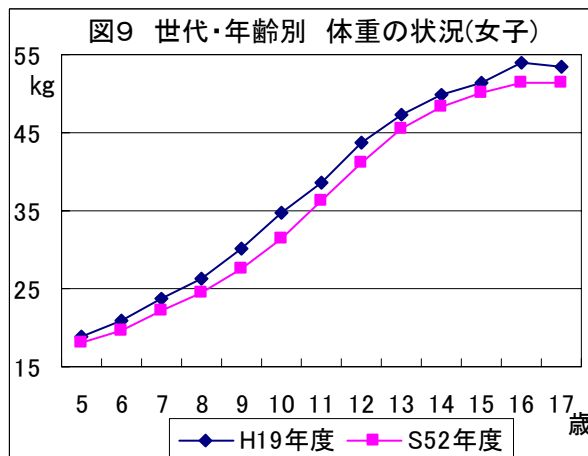
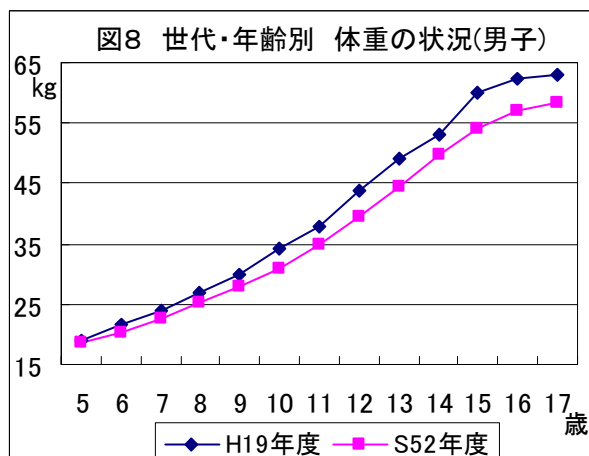
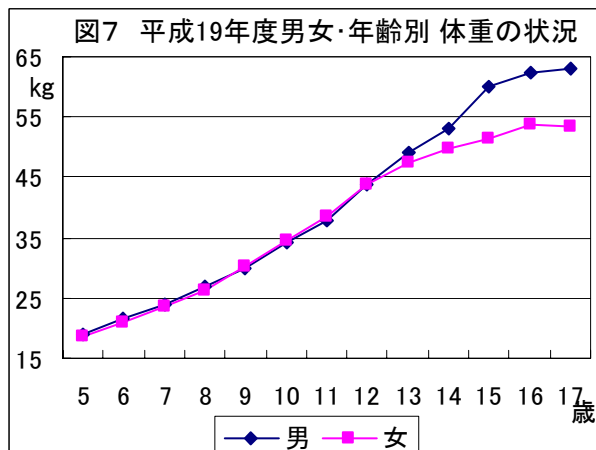
13歳まで身長の場合と同様に、差はほとんどみられず、9歳から11歳までは女子が男子をやや上回っているが、13歳からは男子が女子を上回るようになり、17歳で9.5kgと差が最大である。

### 〈親の世代との比較〉

親の世代と比較すると、表2・図8・図9のとおりである。

身長の場合と同様に、男女とも全年齢で親の世代を上回っている。

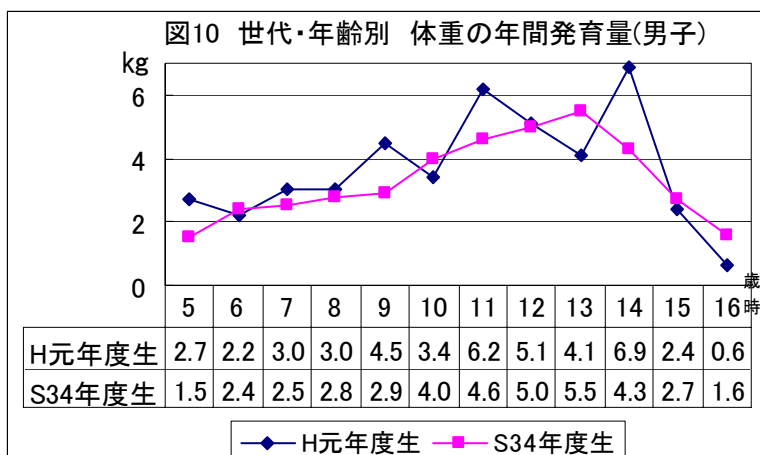
男子では15歳で5.8kg、女子では10歳で3.2kgと差が最大となり、男女とも15歳で親の世代の17歳を上回っている。



## ③ 年間発育量

年間発育量を見ると、図10・図11のとおりである。

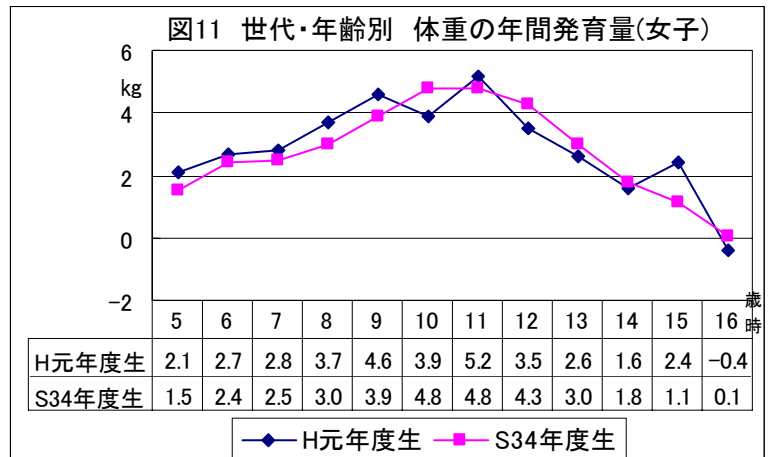
17歳(平成元年度生まれ)の年間発育量が最大となる時期は、男子では14歳時の6.9kgで、女子では11歳時で5.2kgである。



### 〈親の世代との比較〉

親の世代(昭和34年度生まれ)と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代より1歳遅い。また、6歳、10歳、13歳、15歳及び16歳時を除き、親の世代を上回っている。

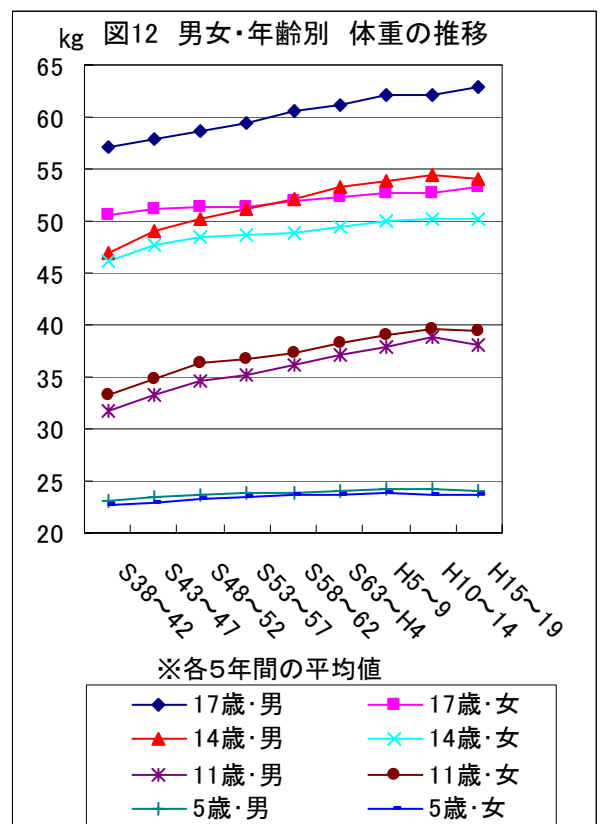
女子では発育量が最大となる時期は、11歳時で、親の世代では10歳・11歳時である。また、5歳から9歳、11歳及び15歳時では親の世代を上回っている。



### ④ 過去45年間の推移

体重の推移を、5歳(幼稚園)、11歳(小学校)、14歳(中学校)、17歳(高等学校)の4つの年齢について男女別にみると、図12のとおりである。  
(注:5年間の平均値を使用。)

昭和38年度から42年度の平均値からみると、身長の場合と同様に増加しているが、年度区分が進むにつれて、上向きの傾斜は緩やかであり、ここ10年では、下降傾向もみられる。  
また、5歳の上向きの傾斜は ごく緩やかである。  
今年度を含む5年平均をみると、前5年平均を上回っているのは、男女とも17歳のみである。



## (3) 座高

今年度・前年度及び親の世代の年齢・男女別の平均値は表3のとおりである。

### ① 前年度との比較

前年度の同年齢と比べてみると、ほとんど差はみられず、男子では、最も増加しているのは、10歳の0.3cmで、最も減少しているのは、9歳及び14歳の0.4cmである。

女子では、最も増加しているのは、9歳の0.4cmで、最も減少しているのは、11歳及び12歳の0.4cmである。

表3 男女・世代・年齢別 座高の状況

(単位:cm)

区分	男 子				女 子			
	平成19年度 A	平成18年度	昭和52年度 B(親の世代)	差 A-B	平成19年度 A	平成18年度	昭和52年度 B(親の世代)	差 A-B
幼稚園 5歳	62.1	62.2	61.2	0.9	61.7	61.6	60.6	1.1
小学校 6歳 7歳 8歳 9歳 10歳 11歳	64.9	65.1	64.4	0.5	64.6	64.7	63.9	0.7
	67.5	67.6	67.0	0.5	67.4	67.4	66.6	0.8
	70.1	70.1	69.4	0.7	70.2	69.9	69.0	1.2
	72.3	72.7	71.6	0.7	73.0	72.6	71.6	1.4
	75.2	74.9	73.7	1.5	76.1	75.9	74.5	1.6
中学校 12歳 13歳 14歳	77.4	77.6	76.2	1.2	79.1	79.5	77.9	1.2
	81.1	81.1	79.1	2.0	81.9	82.3	80.9	1.0
	84.6	84.5	82.6	2.0	83.9	83.8	82.9	1.0
高等学校 15歳 16歳 17歳	87.2	87.6	85.9	1.3	84.6	84.7	84.0	0.6
	89.8	89.9	88.4	1.4	85.0	85.3	84.6	0.4
	91.0	90.9	89.5	1.5	85.3	85.1	84.7	0.6
	91.1	91.2	90.1	1.0	85.6	85.6	84.8	0.8

② 男女の比較

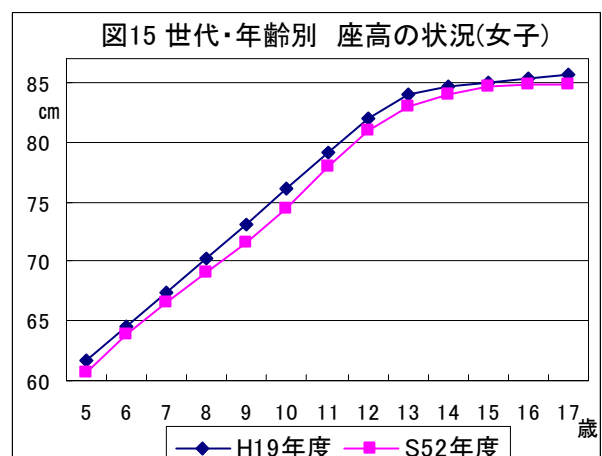
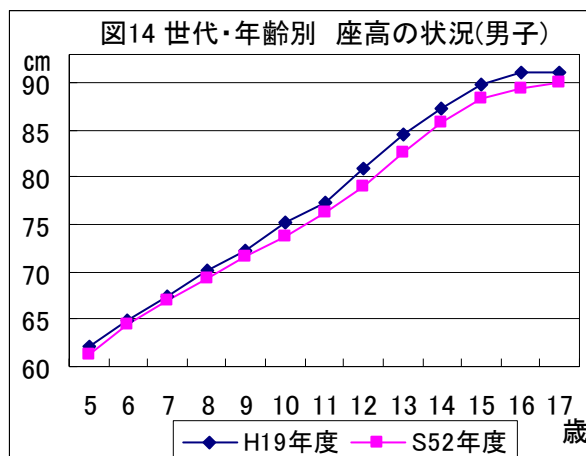
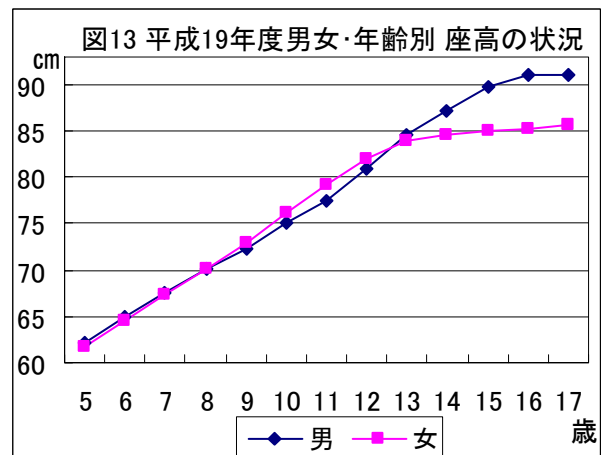
男女を年齢別に比較すると、表3・図13のとおりである。

13歳までは差はほとんどみられず、8歳から12歳までは女子が男子をやや上回っているが、13歳からは男子が女子を上回り、16歳で5.7cmと差が最大である。

〈親の世代との比較〉

親の世代と比較すると、表3・図14・図15のとおりである。

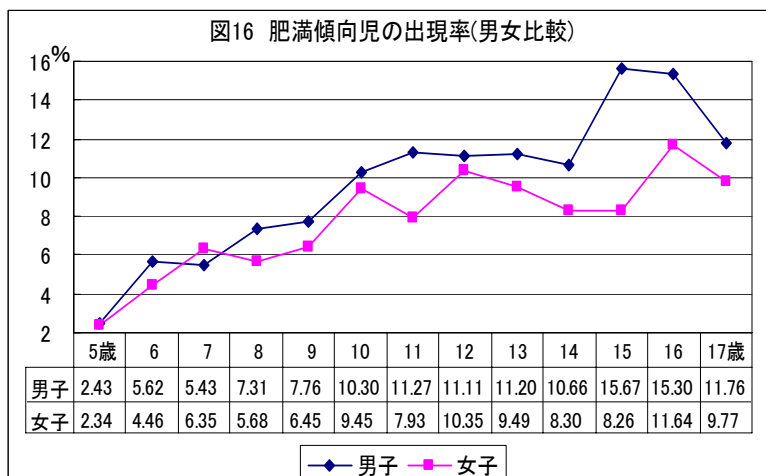
身長、体重の場合と同様に、男女ともすべての年齢区分で親の世代を上回っている。男子では12歳及び13歳で2.0cmと差が最大となり、16歳で親の世代の17歳を上回っている。女子では10歳で1.6cmと差が最大となり、15歳で親の世代の17歳を上回っている。



#### (4) 肥満傾向児の状況

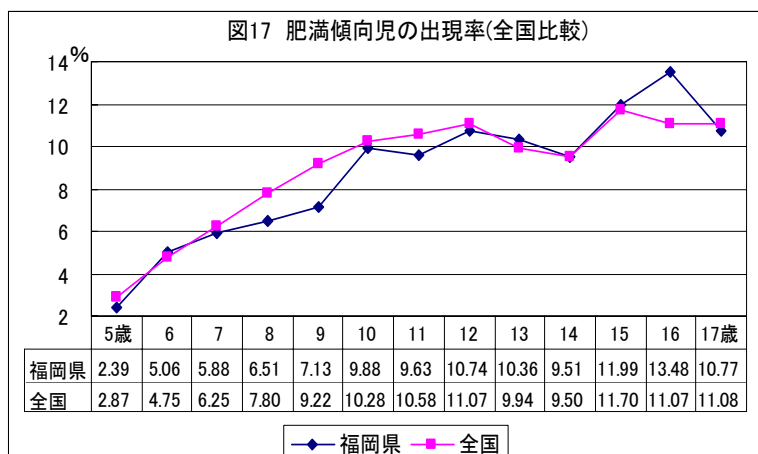
##### ① 男女の比較

肥満傾向児の出現率を男女・年齢別に比較すると、図 16 のとおりである。  
7歳を除く全年齢で男子が女子より出現率が高い。



##### ② 全国との比較

肥満傾向児の出現率を全国平均と比較すると、図 17 のとおりである。  
6歳及び13歳から16歳までで全国より出現率が高い。



注) 肥満傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上の者である。

$$\text{肥満度} = (\text{実測体重} - \text{身長別標準体重}) / \text{身長別標準体重} \times 100 (\%)$$



## 2 健康状態調査結果

### 1 疾病・異常等の状況

疾病・異常等の被患率（30頁の9表）の主なものを学校別に表すと、次表のとおりである。  
「むし歯(う歯)」の者の割合が高く、小学校で65.9%、高等学校で69.8%となっている。

#### 9 主な疾病・異常等の被患率(平成19年度/学校別)

区分	裸眼視力 1.0 未満の者	眼の 疾病・ 異常	耳 疾 患	鼻・ 副 鼻腔 疾患	むし歯(う歯)			ア ト ピ ー 性 皮 膚 炎	心 電 図 異 常	蛋 白 検 出 の 者	ぜ ん 息
					計	処 置 完 了 者	未 処 置 歯 の あ る 者				
幼稚園	X	2.3	4.3	7.2	53.8	23.6	30.2	3.6	…	0.6	1.5
小学校	30.9	5.6	6.3	18.1	65.9	29.4	36.5	2.5	3.9	0.8	2.5
中学校	51.8	6.5	4.7	15.6	57.6	24.8	32.9	1.8	3.7	3.4	1.9
高等学校	X	7.5	2.5	9.1	69.8	37.4	32.3	1.6	4.1	3.5	1.3

注1)心電図異常については、6歳、12歳及び15歳のみ実施している。

2)「X」は疾病・異常被患率等の標準誤差が5%以上、受検者数が100人(5歳は50人)未満又は回答校が1校以下のため統計数値を公表しない。以下同様。

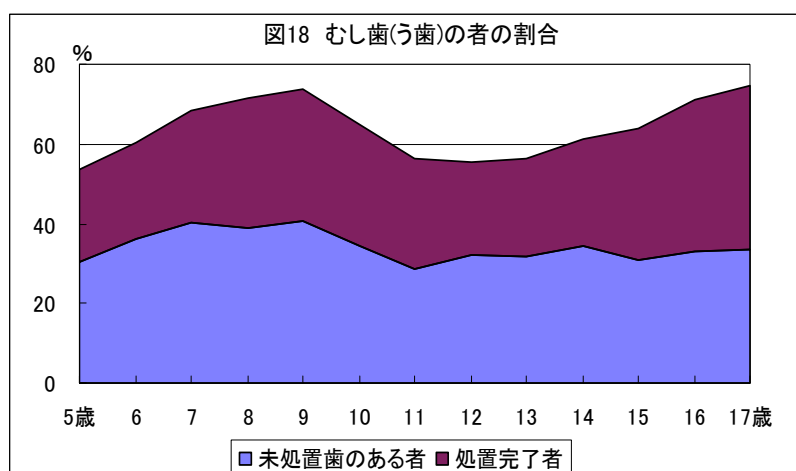
## 2 主な疾病・異常等

### (1)むし歯(う歯)

むし歯の者の割合を年齢別にみると、図18のとおりである。

5歳から9歳まで及び12歳から17歳までは、年齢が高くなるにつれて割合が上昇しているが、9歳から12歳までは、年齢が高くなるにつれて割合が低下している。

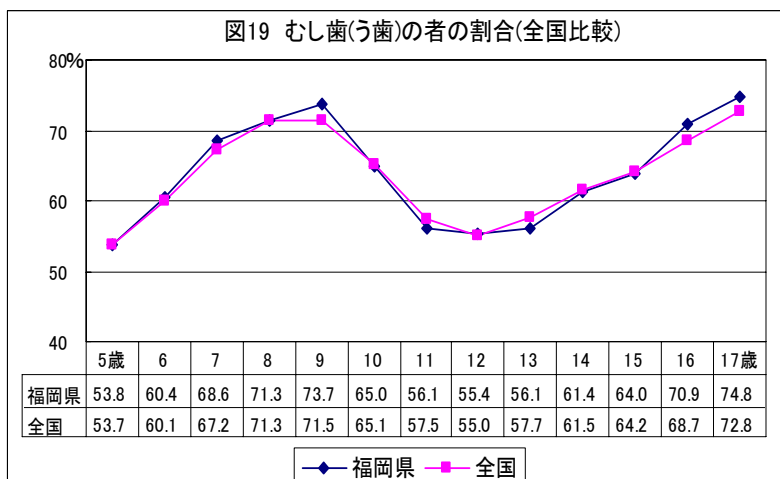
また、未処置歯のある者が、全年齢とも概ね3分の1程度を占めている。



#### 〈全国との比較〉

むし歯の者の割合を全国と比較すると、図19のとおりである。

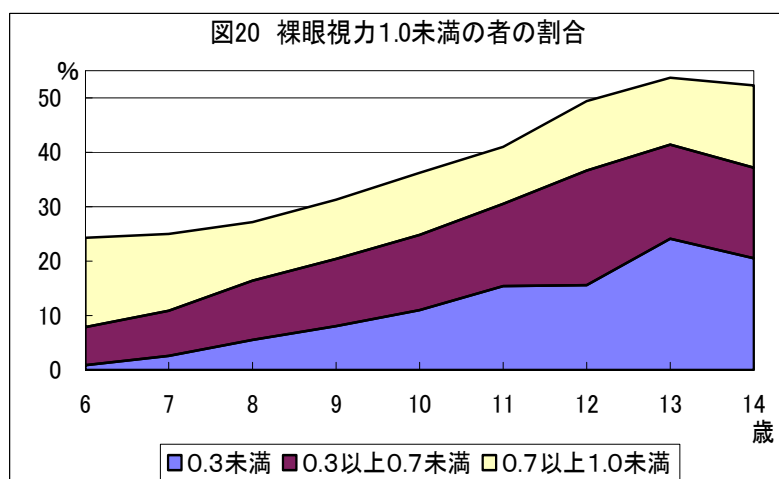
8歳、10歳、11歳及び13歳から15歳までを除く年齢で全国を上回っている。  
なお、福岡県の数値と併せるため、全国の数値の小数点以下第二位を四捨五入した。



## (2) 裸眼視力1.0未満

年齢別の裸眼視力1.0未満の者の割合は、図20のとおりである。

年齢が高くなるにつれて上昇し、13歳では53.7%となっている。また、裸眼視力0.3未満の者の割合も、年齢が高くなるにつれて上昇し、13歳で最も高い24.1%となっている。

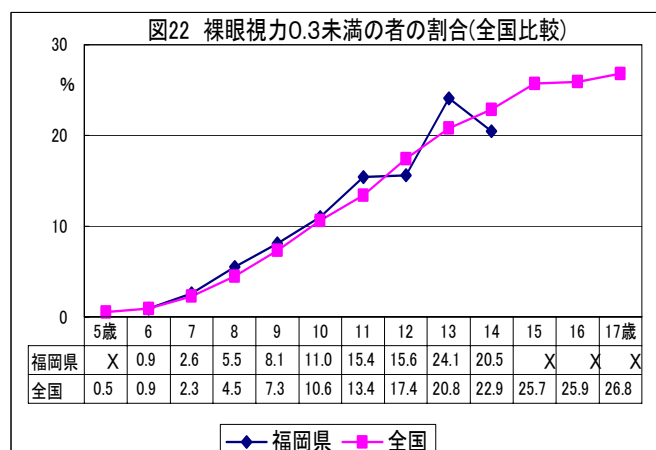
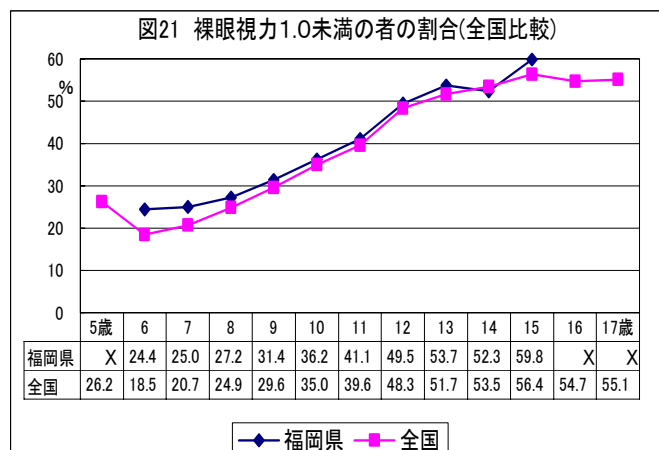


### 〈全国との比較〉

裸眼視力1.0未満の者の割合を全国と比較すると、図21・図22のとおりである。

比較可能な6歳から14歳・15歳まででみると、1.0未満では、14歳を除く年齢で全国を上回っている。また、0.3未満では、6歳、12歳及び14歳を除く年齢で全国を上回っている。

なお、福岡県の数値と併せるため、全国の数値の小数点以下第二位を四捨五入した。



### (3)アトピー性皮膚炎

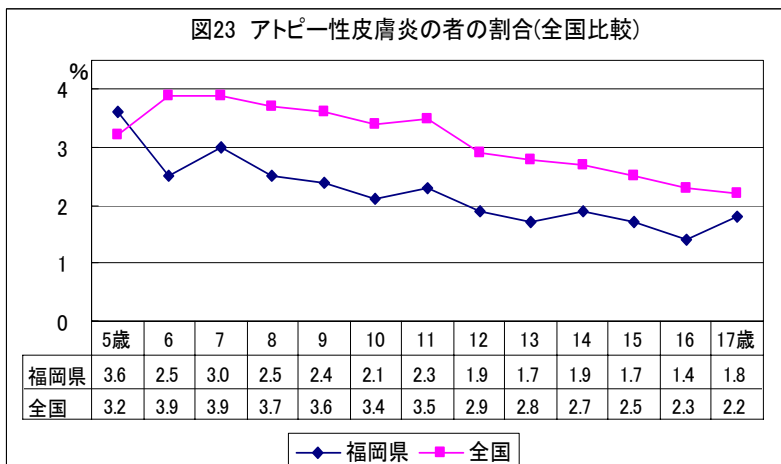
年齢別のアトピー性皮膚炎の者の割合は、図 23 のとおりである。

年齢が高くなるにつれて、概ね減少する傾向にあるが、7歳、11歳、14歳及び17歳では1歳年下の割合より高くなっている。

#### 〈全国との比較〉

全国と比較してみると、5歳を除く全年齢で全国を下回っている。

なお、福岡県の数値と併せるため、全国の数値の小数点以下第二位を四捨五入した。



### (4)ぜん息

年齢別のぜん息の者の割合は、図 24 のとおりである。

12歳以降は低下傾向にあるが、10歳までは概ね増加傾向にある。

#### 〈全国との比較〉

全国と比較してみると、全年齢で全国を下回っている。

なお、福岡県の数値と併せるため、全国の数値の小数点以下第二位を四捨五入した。

